





梅堂國政

三編



<48-8353>

叫び顔の紅葉の苗流きて未だ乾らざる今年葉月の末の方筑紫
 浮るる押の客富永某が身に餘る戀の思按ふ呉果てやうの出る靖と知る遣
 手於金小妓夫政が正しく押へ辱しめ金物言ふ久方の自然と卑く疎かか
 「イヤ物狂ふて仇とは」月小因この仲の町其名も高き杉戸屋よく人も嫌は滅多切
 二婦と仆と五個まで微傷を負へ世天劇場終り上る三編草紙脚色は巧み自由記
 者近頃名代の錦繡城時し世上を買ひて持離れる杖束舞臺蕩士の腸と
 寒くしゆ又白狐の威を控く勸懲両方當て込に仕打を致し摸し出書舗の需は
 汗を拭ひ樂山生が骨折も時取ての大仕事絞りの棒の気の毒まが粹草紙不
 不粹の序文戀の仇めあふれども徒然の硯海小筆足を洗ひ書き集ふる
 窓の下折る風は誘へる浅草寺乃
 鐘の音いたる花街の夕暮るらん

自由存処房主人



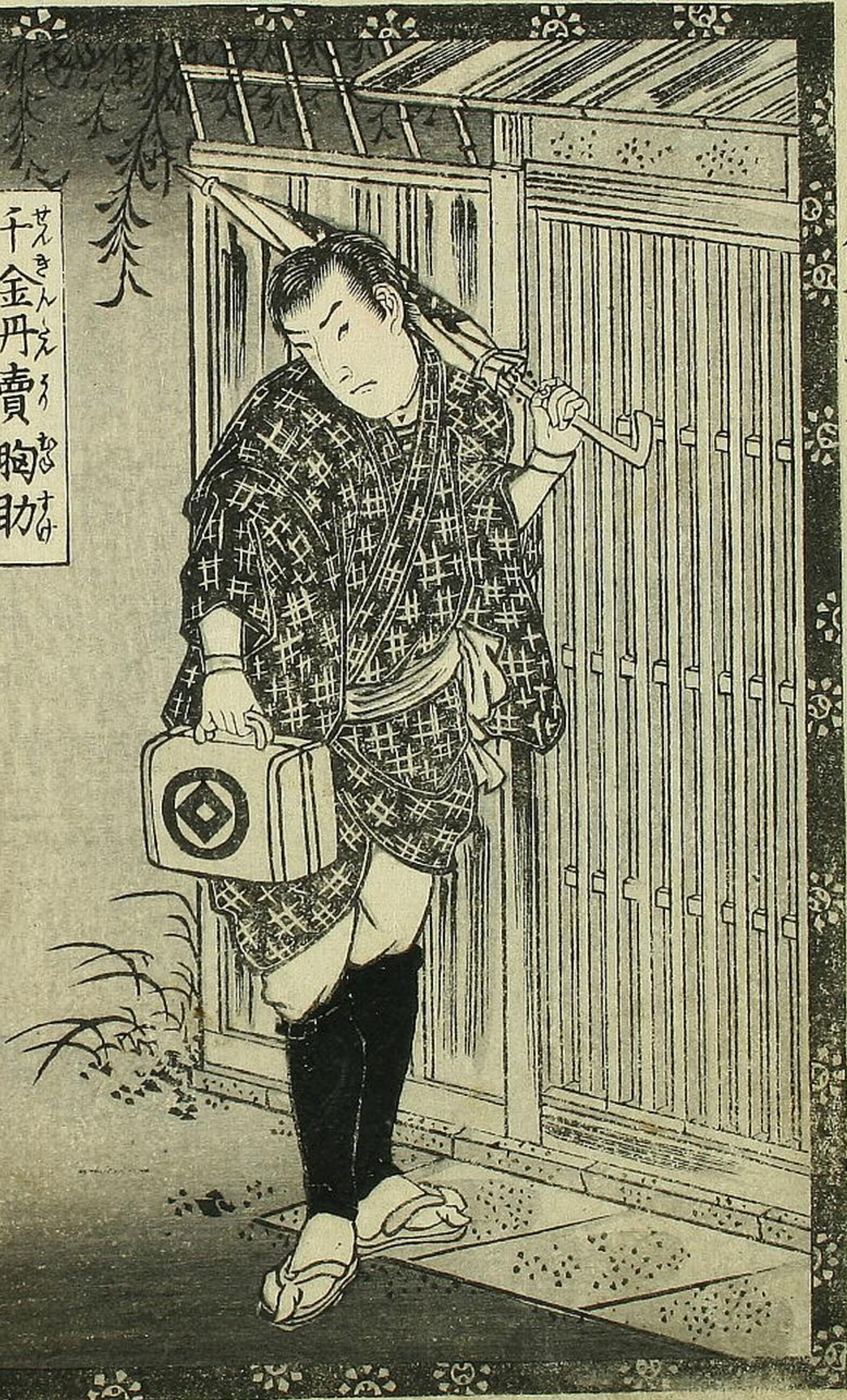
俊雄妻於貞

同倅富永俊雄

老功の手
練暗の倅
の手の内
を試ま

富永幸太夫

千金丹賣胸助



三編のつぎ 那 夏の夜

らぬ風が吹く夜は物
花がさきの後をさる前
て実出すらに解明も

小のりまのありと汗か
鳴貝の貸浴衣は清

笑とんせて呉りおれぬト

物花のさきとる物花は種

幸若多のこゝろにて物
のりひで今宵うらぶ糸の自由

味ませるがとて私や家合があつてト

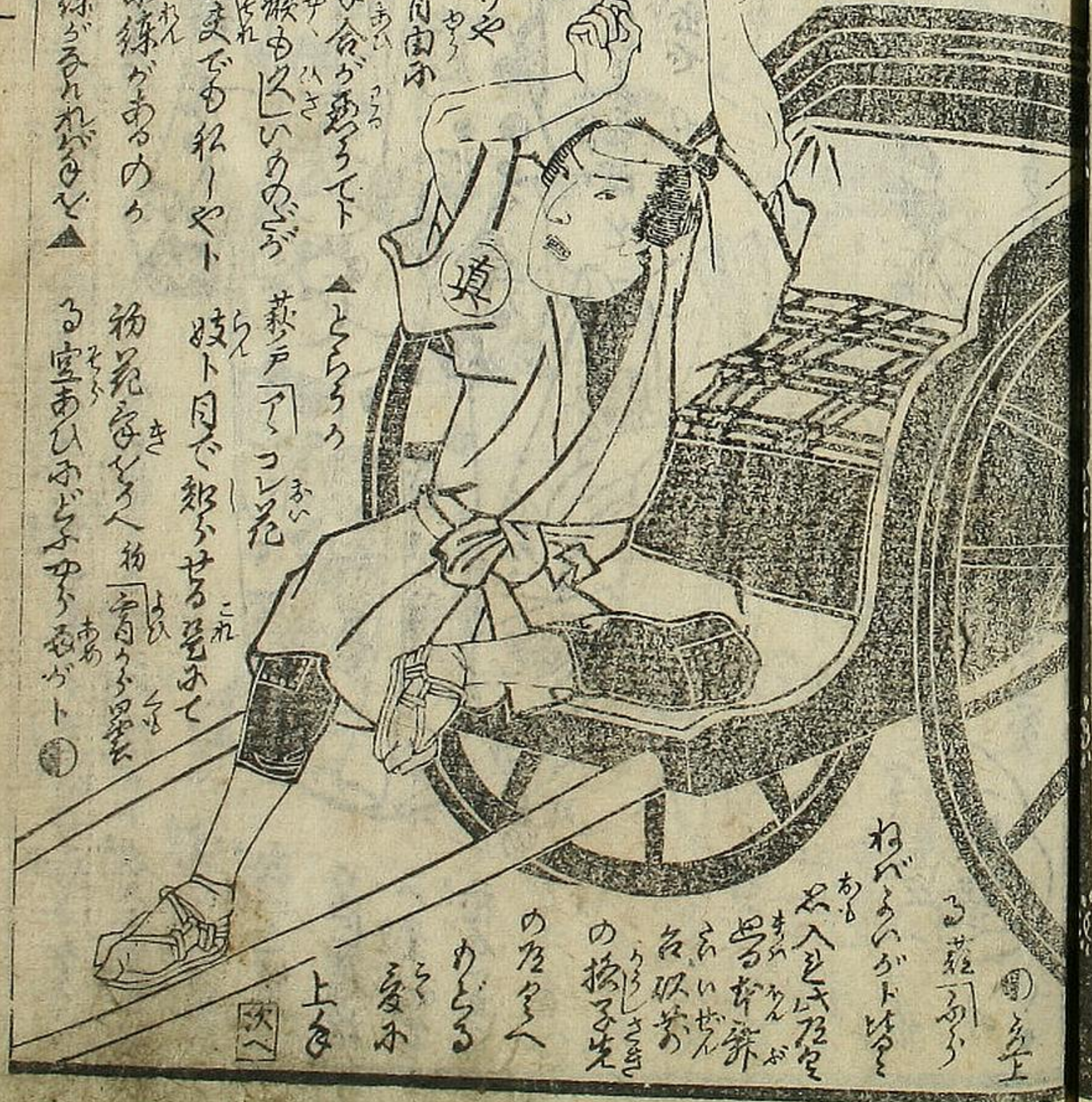
俯向て語る那「テおぬの癖もい」いのぞう

マア機嫌直して僕とあふ初まてもねーやト

立着る那「まご宿永み糸練があるのう

物「ううていさけれど茲「糸練がきれいなぞ

七人切三上



ねいふがト
お入はた
お入はた
お入はた

のたさへ
かたさ
愛小
上

物「花さきとる物
る空あひふとふ中

三

カレンカチ 天ノメ切是小ノ切格予先 どの通儀が命をすてる覚悟を病るるやハ
矢張りとも切下る小冊品をうけ
人力車あり 扱て
萩戸屋の元世先
夜の持風の
秀あそび
契の口ト
件ごんの人力車の中必おのまは服を
こすり伸を七まらから受出せ
ま刃遊々あまらんて来り
夕アハ容と萩戸屋の二階へ
上り技屋の中を原さけが矢張り
まよりあられと花布お巻まつて
人力の車は萩戸屋と萩戸屋ト口と



まよりあられと花布お巻まつて
人力の車は萩戸屋と萩戸屋ト口と
まよりあられと花布お巻まつて
人力の車は萩戸屋と萩戸屋ト口と

やのさやうだが二回ある後内はも若旦那のやうな
形に心配を忘れず居る親を頼り居るやうな
あつたの骨れでやびりあつた汗を奪ふと見え
ト男内を扱ふは同上の天戸とわけは萩の俵出
まよりあられと花布お巻まつて
人力の車は萩戸屋と萩戸屋ト口と
まよりあられと花布お巻まつて
人力の車は萩戸屋と萩戸屋ト口と
まよりあられと花布お巻まつて
人力の車は萩戸屋と萩戸屋ト口と
まよりあられと花布お巻まつて
人力の車は萩戸屋と萩戸屋ト口と

七人 刀三上

次のおき 芝赤羽橋の揚

舟藤を一面の正舞を巻上へ

よせ赤羽橋と死したる樺干せんせ

工役局と三田の入口せんせ

元下の方柳の大樹へ

は舞あり日午後

南古川橋の併り

小淫妻女あえの

あかの三人け

職人仲の仕出

見ゆ

合方

おと

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る

る



九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて



九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて

九何と打はて



大木五九券日和下駄と
 又止んぶらひの
 又止んぶらひの
 又止んぶらひの

甘茶枝とく
 甘茶枝とく
 甘茶枝とく
 甘茶枝とく



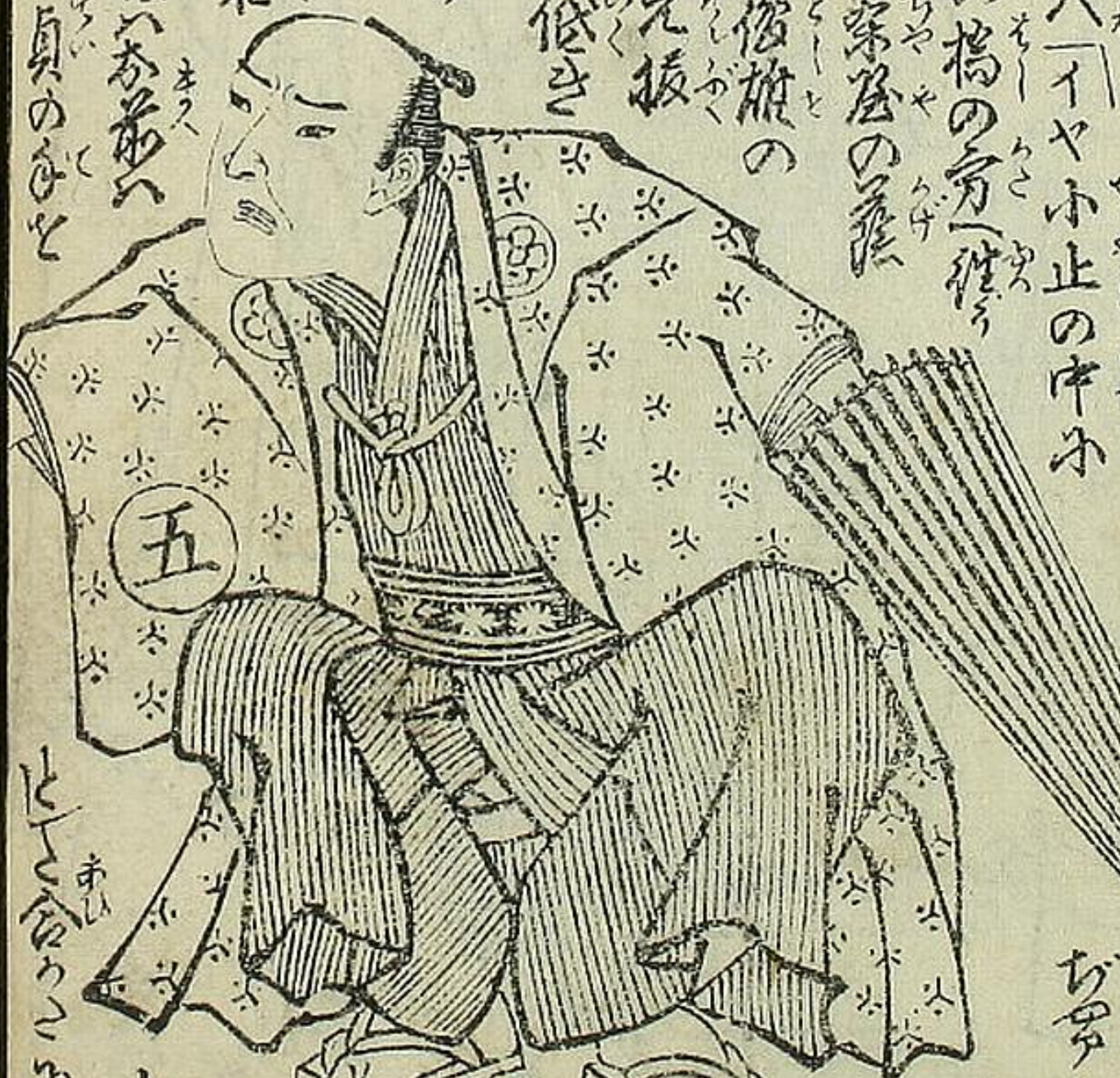
何の利と何
 何の利と何
 何の利と何
 何の利と何

大分功名
 大分功名
 大分功名
 大分功名

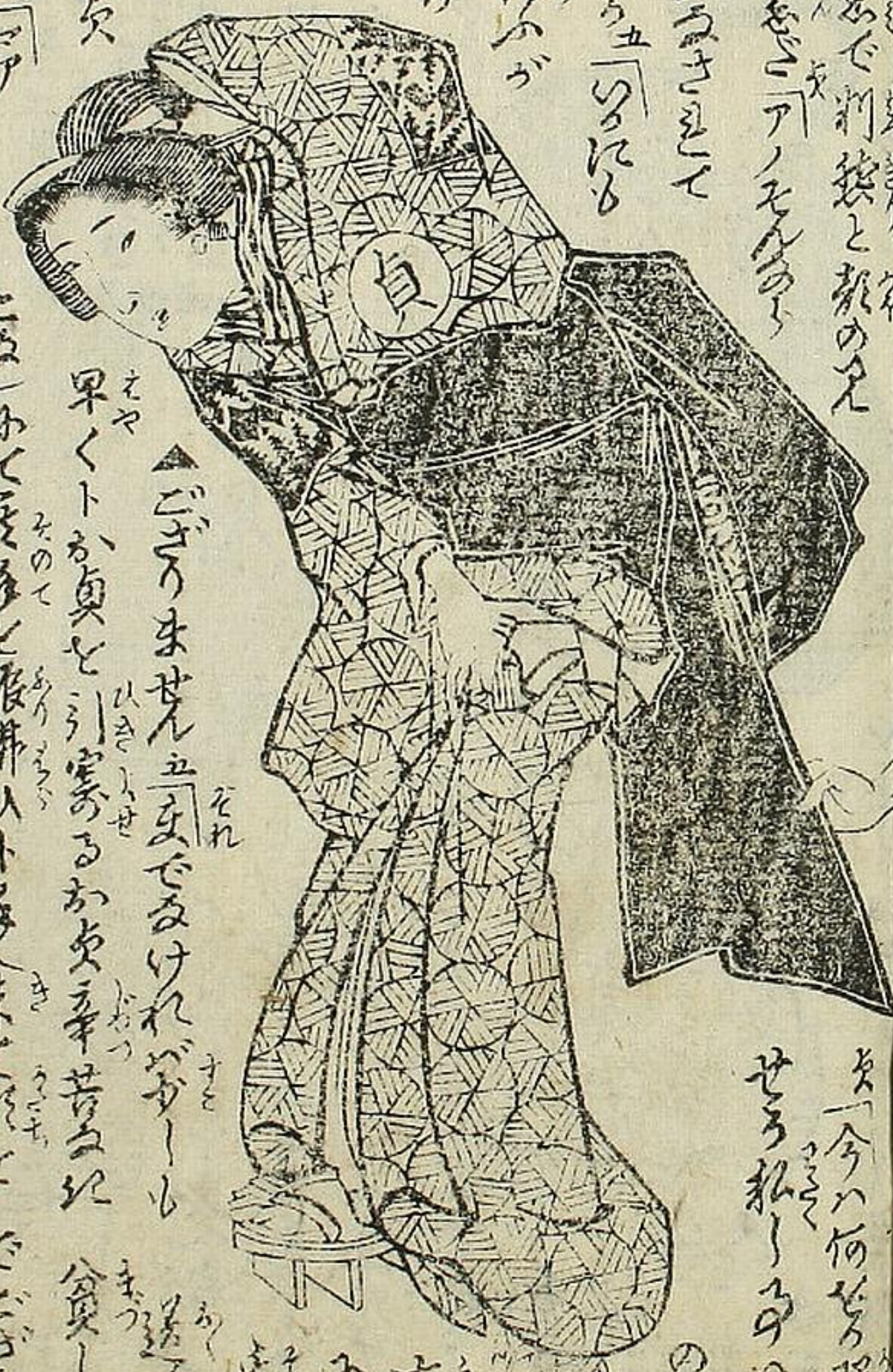


つぎ病人を病む父の安否も問ひ承る候不違ご
 病入を病む父の安否も問ひ承る候不違ご
 病入を病む父の安否も問ひ承る候不違ご
 病入を病む父の安否も問ひ承る候不違ご
 病入を病む父の安否も問ひ承る候不違ご

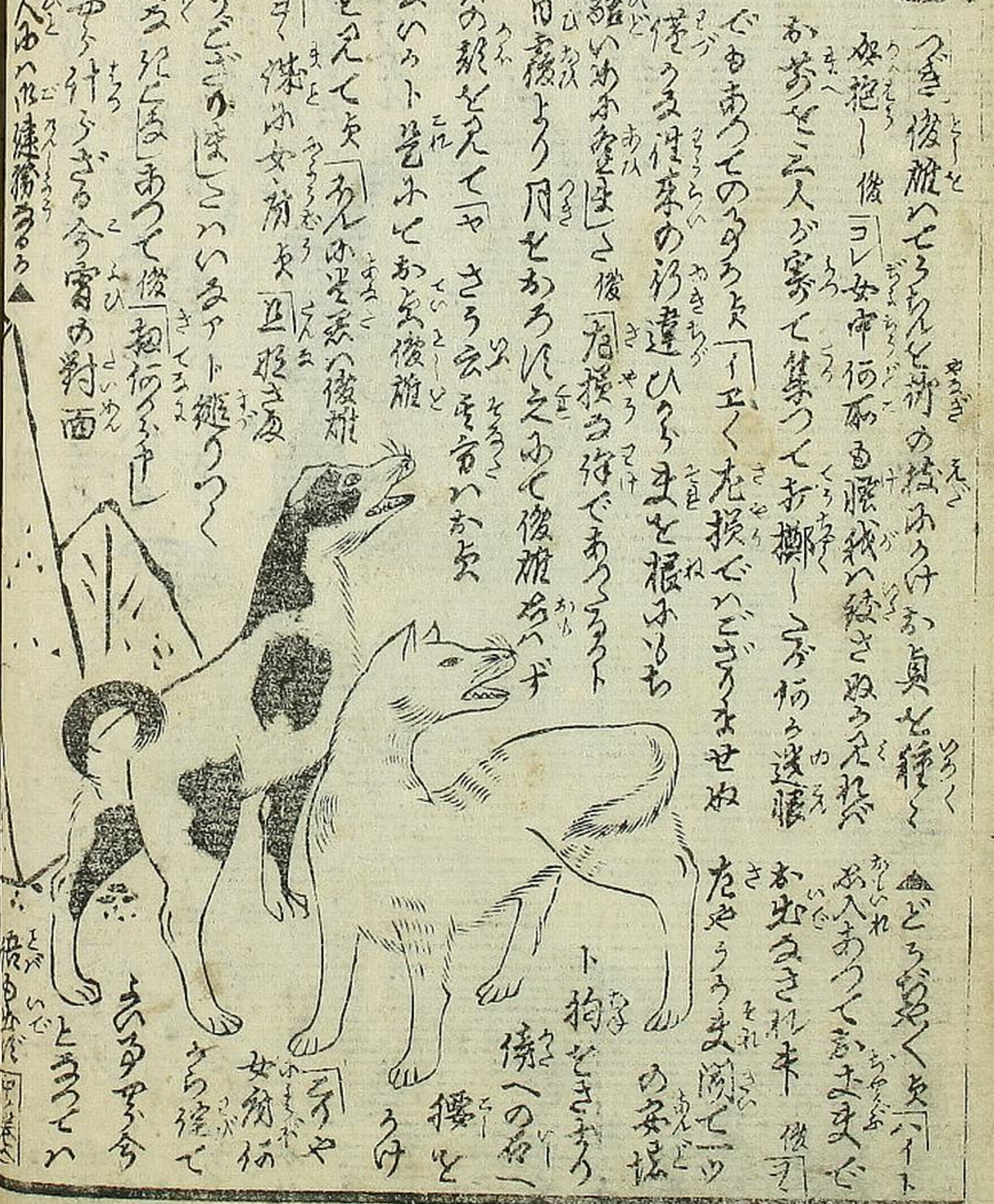
いふれませ五 何れとて扱はる
 一併とて下意小使候と申すか貞の心
 病入を病む父の安否も問ひ承る候不違ご
 病入を病む父の安否も問ひ承る候不違ご
 病入を病む父の安否も問ひ承る候不違ご
 病入を病む父の安否も問ひ承る候不違ご



より「ア」病入を病む父の安否も問ひ承る候不違ご
 えぬのハ候意ニ「ア」モシ
 せりお花びらさして
 一寸控んで仍か
 ヤロくと何あり
 せららの石の
 間七五郎の情
 おあつらうト
 お貞お花つつか
 ハせをせ押へ「ア」
 せりお花びらさして
 五七の影纏う十書
 辺りの家へ連込む
 第う十女「イ」くたすへ



改め候「ア」くお福下さるませ形中し
 勝を妻と今の何と表表の婦女とあり
 お病ももごさるませらばせりお花びらさして
 引はしとの安の勝けを差る候不違ご
 うへに



大蘇芳年畫

大日本名將鑑

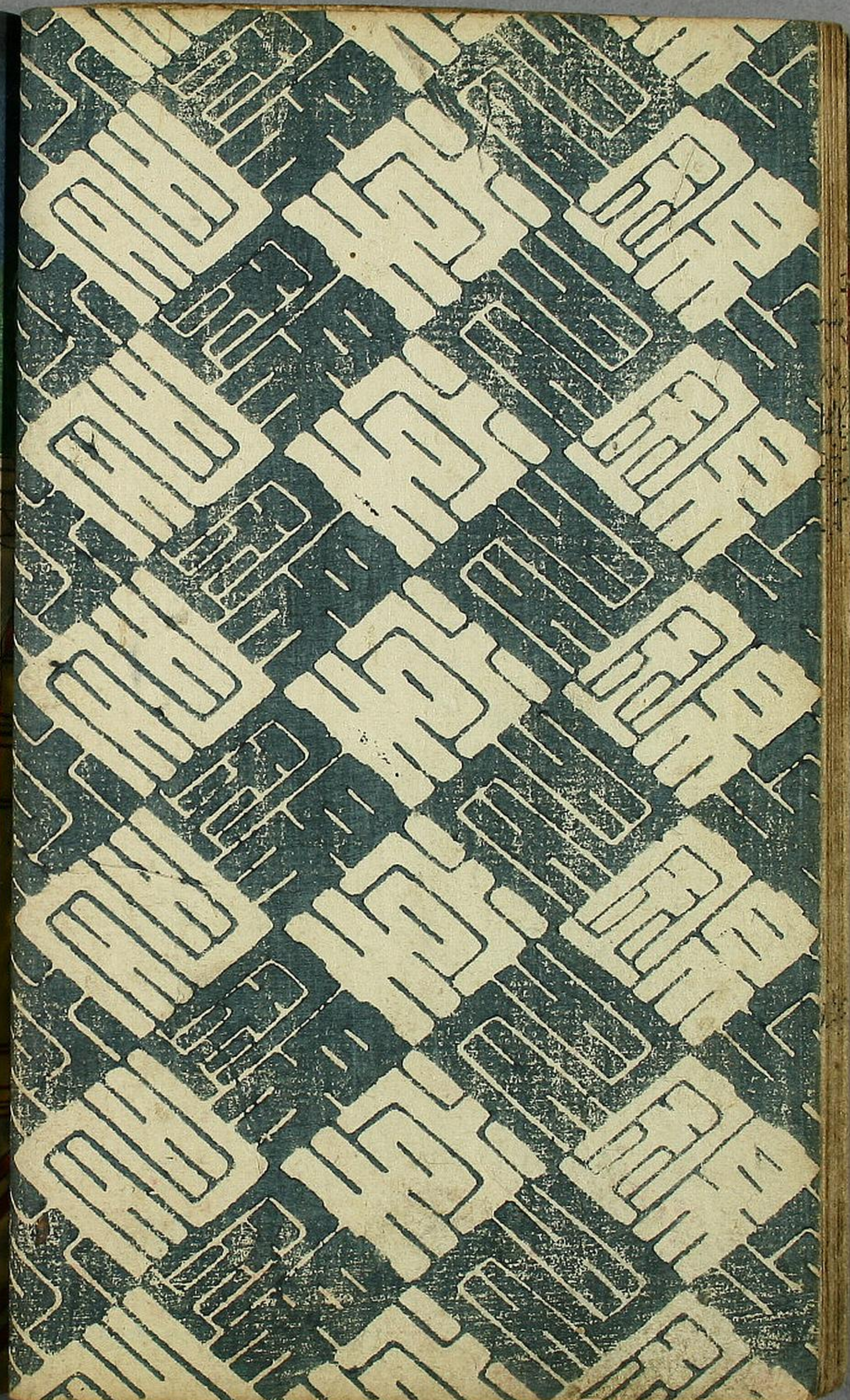
大錦繪 五拾番續

這ハ神武帝ヨリ寬永年代ニ至ル迄皇國有名ノ大將ヲ選
 抜シテ各小傳ヲモ記載シ彫刻摺立等入念美濃々仕立先
 般賣出シ候処御愛顧ヲ以テ各位方ヨリ追々御注文受新版
 之分摺立間々合兼發兌延引仕恐入候跡本年十月迄三全
 版致シ候間不相變陸續御請求之程伏テ奉希上候以上

東京書肆

錦壽堂

船津忠次郎板



つき千合丹と持物音喜喜小
飲す之小噴止と事なまその
お旁小まへ巻

つてお目小刺り
お礼と下さる
ごうませうと

上より白髪
松竹かづら
病ひ辨巻肩

入好との茶湯ゆく
出てまう「まおを
のり肩が只今の
お茶と下さる」

狗まあ、お茶振か
お茶のていどお茶を
さうりまのり肩
香ちま只今ふあんと下さる



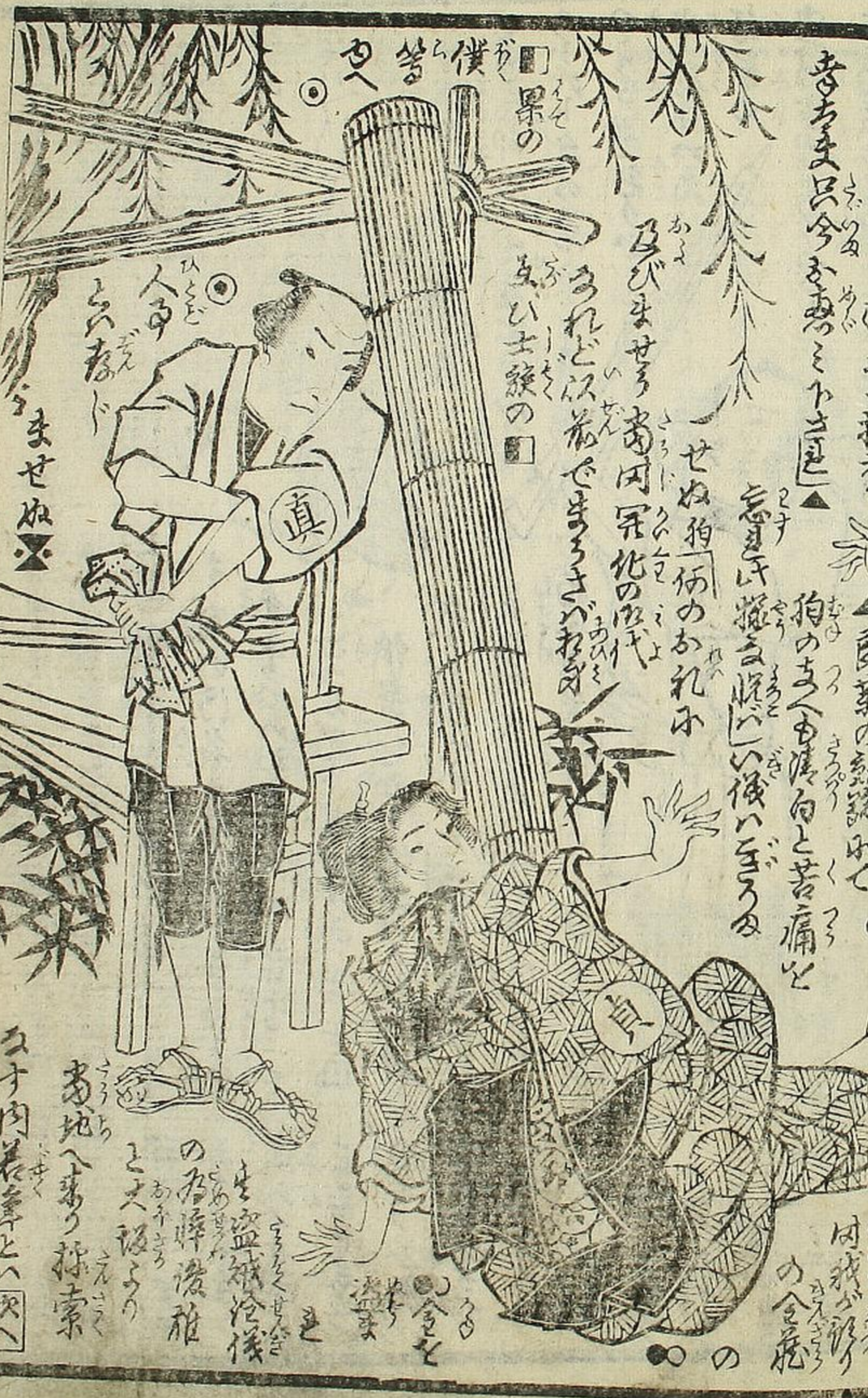
玉ま「お生伴の糸結地へ狗
まう牛が坐る糸の田在へ何結
渡この前とあつてお後中
福糸結小まう平拍「成程ま
て大夏糸糸結くまお構
ひまぐのま後の
おのまのま

お世せ下さるお
おのまのま
おのまのま
おのまのま

おのまのま
おのまのま
おのまのま
おのまのま

おのまのま
おのまのま
おのまのま
おのまのま

おのまのま
おのまのま
おのまのま
おのまのま



おのまのま
おのまのま
おのまのま
おのまのま

おのまのま
おのまのま
おのまのま
おのまのま

おのまのま
おのまのま
おのまのま
おのまのま

おのまのま
おのまのま
おのまのま
おのまのま

おのまのま
おのまのま
おのまのま
おのまのま

おのまのま
おのまのま
おのまのま
おのまのま



確たる証候がござる幸に
 とて別小のれに盗まは紙幣の
 正小十四紙幣番号一々見え
 あれはまを掛り小探家
 宝案月日と送り病りませ
 紙幣の合
 違の取違えの紙幣いよく紙ハト大き
 門口と出で拍の一件の關係の渠が挙動と
 寢小の只一紙のりよく正路と有り者さま
 まと勝りてとある十四札ハ一晩夜影を
 あて置置川より受取番号の新竹村
 違の取違えの紙幣いよく紙ハト大き
 門口と出で拍の一件の關係の渠が挙動と
 寢小の只一紙のりよく正路と有り者さま
 まと勝りてとある十四札ハ一晩夜影を
 あて置置川より受取番号の新竹村

八幡堂
 の主人
 おま
 常
 十五九
 て来
 送
 入
 へ



盗賊
 被擄
 捕
 天罰巡り来て生盗賊捕縛と有り
 後其の容易小知且苦者に反捕共
 天罰巡り来て生盗賊捕縛と有り
 後其の容易小知且苦者に反捕共
 天罰巡り来て生盗賊捕縛と有り
 後其の容易小知且苦者に反捕共

五月
 湯

俊州沖繩縁へ出張云

此は是れ縁の父の妻を放

親子交際の縁と今日うざり

切ておされ幸や何と下幸を

まこのは有て業コリや悴油の

さば違ふう寂寂さう

そのまう久方の縁宅と

云ひ幕て中内なる波

縁を果さばは控置

子統り縁と接し公令

さのもお忘れ免有とるけ

俊やき縁とぬとぬとぬとぬと

ト合方キソリとる更お何ぞ

親子の縁とお貞の縁あふくも

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と



縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と



縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

縁と縁と縁と縁と縁と縁と

つぎ 吾知るの心まらう



不孝の死を免

わが愛を沖繩録に記さずと
相巧くは偽りて親子の縁を切ふと云ふは仔細ありんと
酒前より酒を奉初む何れか後之難後と云ふまはと
あふ心と見候ふよも同違ひていあるまのうかま候
ふと云ふも親の如くは御中にお安ふのよ
何れもまん紙を急せおゆし中さへ下見
子花戸を介して初葉を記つる節後
辱しめらるしうと云ふ寸後も帯
ざね私を悪びとせらくと席りと
洋しく得る一歩の歩みゆへに急み候
ならん之を紙一歩の歩みゆへに急み候
初葉大少と急む一歩の歩みゆへに急み候
急に初葉一歩の歩みゆへに急み候
急に初葉一歩の歩みゆへに急み候



萱川と云ふ不孝の死を免
さすの死を免
さすの死を免
さすの死を免
さすの死を免
さすの死を免
さすの死を免
さすの死を免
さすの死を免
さすの死を免

近世文武英雄傳

中本 飯田定一集 大蘇芳年画

鹿兒島征討實記

同 飯田定一集 大蘇芳年画

霜夜鐘十字辻策

從初編 武田交來録 大蘇芳年画

冠松真土夜暴動

前後兩編 武田交來録 大蘇芳年画

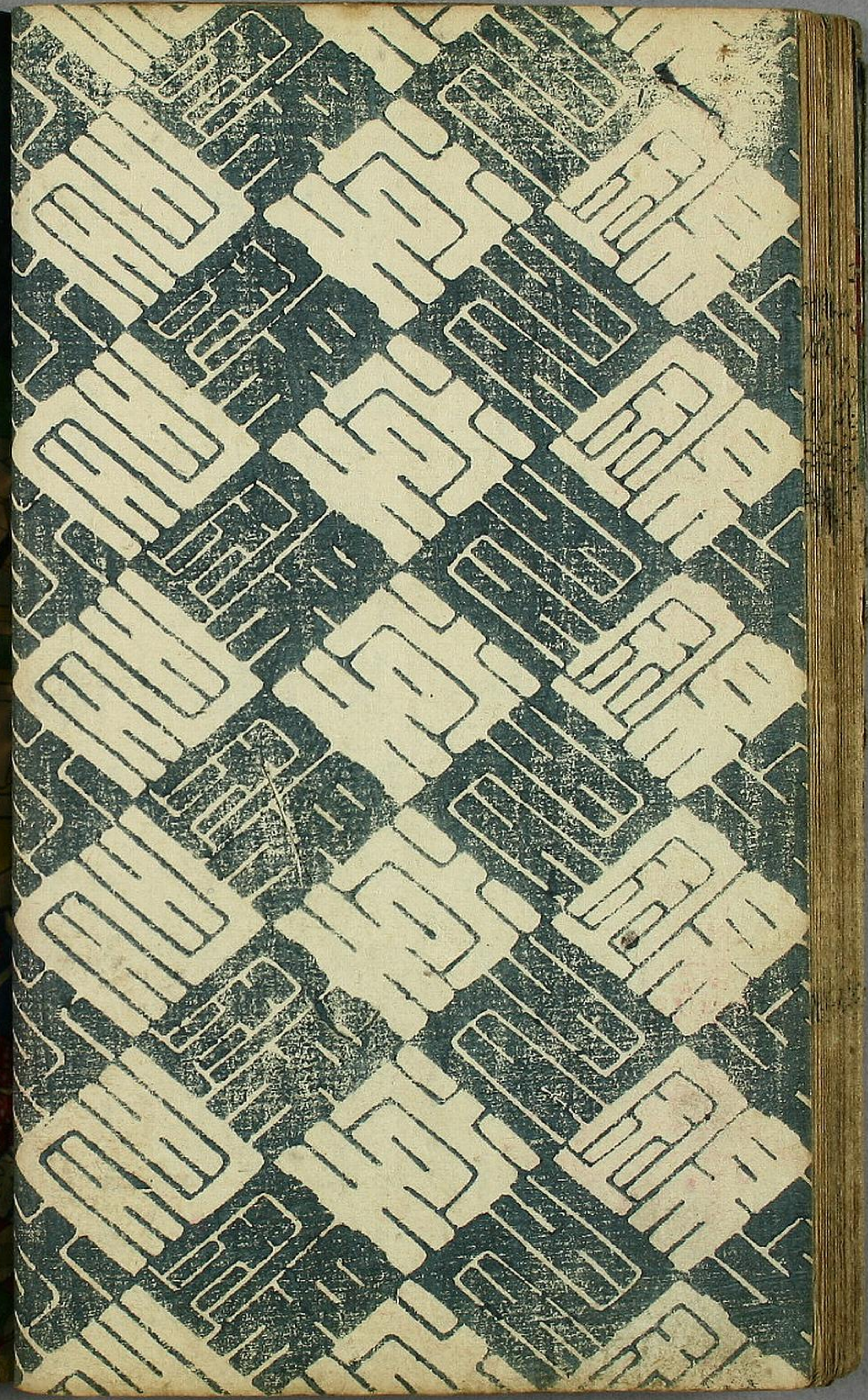
這回へ江湖小雷鳴しける神奈川縣下相模國平塚在の真土村
の勢紙近來稀なる憤怒の拳動多年の積惡應報ニテ終不天の
冥罰免れを義徒のよめに豪家と絶滅する勸善懲惡の教
戒りのかゝりなり



戀仇成皿花街夕暮
編三

錦壽堂梓

三編下



忠の

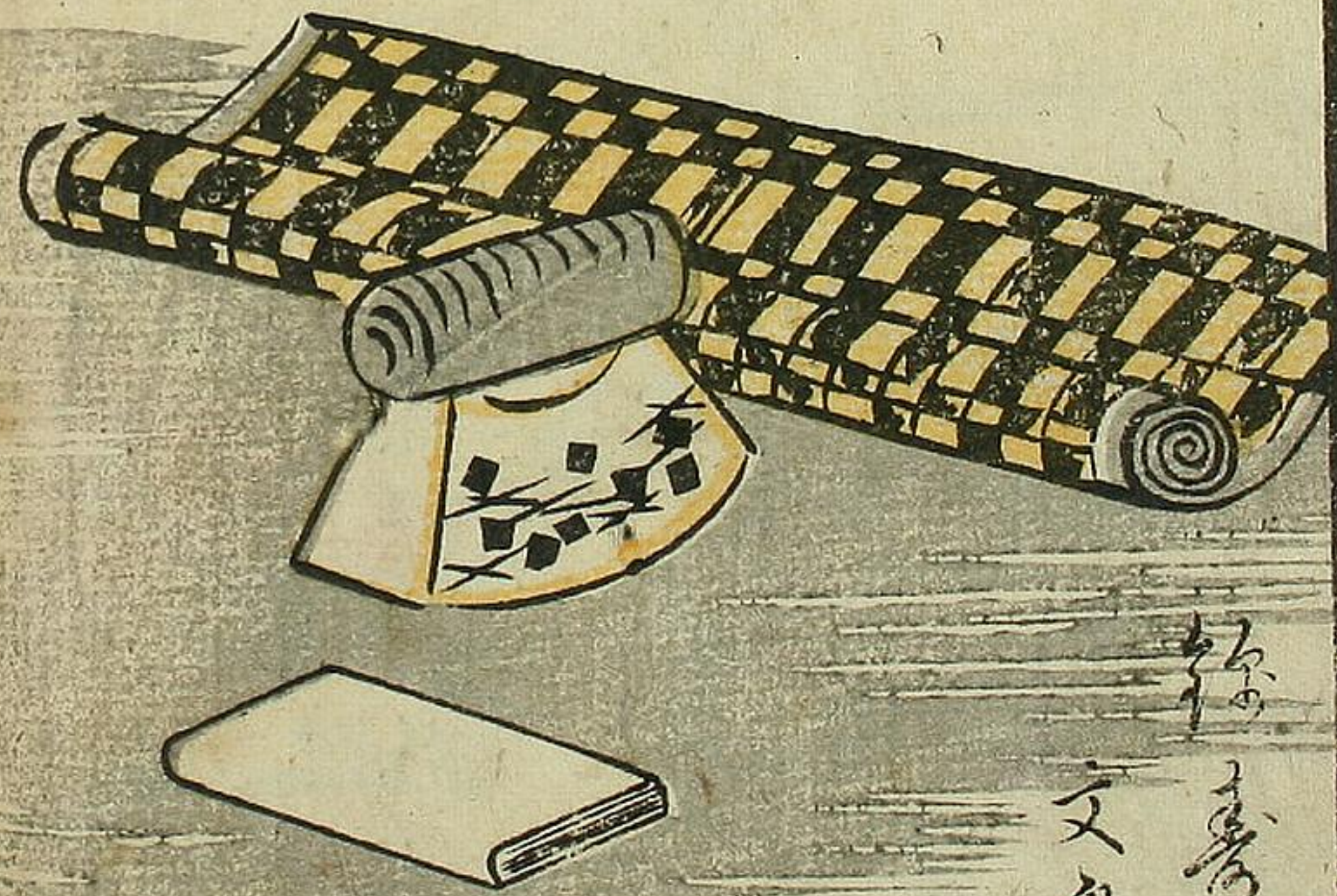
あざ

二べんの

ト

むんまき

おまさ忠



忠の

文解

中々のきまッ奇と打果しと幸急と隠せ父か勝と勝の父ト倭槍と
 屨ほ又嘆入るとか真実抱する後「厚小背き」の影の影ひお叶へ
 下さる父上の心か盛と盛「平れ」の死ぬいぬの厭いねと泣く 倭小頼有く頂戴仕り奉るト
 後「妻か幸若イヤサ完子源又由さるはさる」 押ひさる名残惜存小立上るを
 ト立上る「倭槍さぬまはやく」 お真又袖小継と拵以倭「父」人
 生るて

の倭「子」未練あるト能ととらふ
 幸「倭槍」あれ倭「ッ」幸「根」本は「傳」
 のり「千」壽院とを是「小」頼有と
 幸む不責の業物終不是「と」秘を

● 帯せり
 ● けい
 ● けい
 ● けい

七ノ月三ノ日

何と仰ふかト警言を以て侍を
 幸かまか刀を拵へてお入
 せしコリヤ何故の由生官を
 致し生官をせよトエ
 言へし「めい」の故に
 ませぬトやうく一刀を
 たるおちまの御儀
 き入る幸「是」速
 是情と極め切後
 際白の心と
 一「身」牌小
 有る不汁濃
 改宅換不



何と仰ふかト警言を以て侍を
 幸かまか刀を拵へてお入
 せしコリヤ何故の由生官を
 致し生官をせよトエ
 言へし「めい」の故に
 ませぬトやうく一刀を
 たるおちまの御儀
 き入る幸「是」速
 是情と極め切後
 際白の心と
 一「身」牌小
 有る不汁濃
 改宅換不

幸「イヤ」致せト
 するト多
 幕小
 拵一
 肉入
 且形



幸「イヤ」致せト
 するト多
 幕小
 拵一
 肉入
 且形

つぎに...
お政お守り政...
海老がの...
永小初元...
今更切るといふ

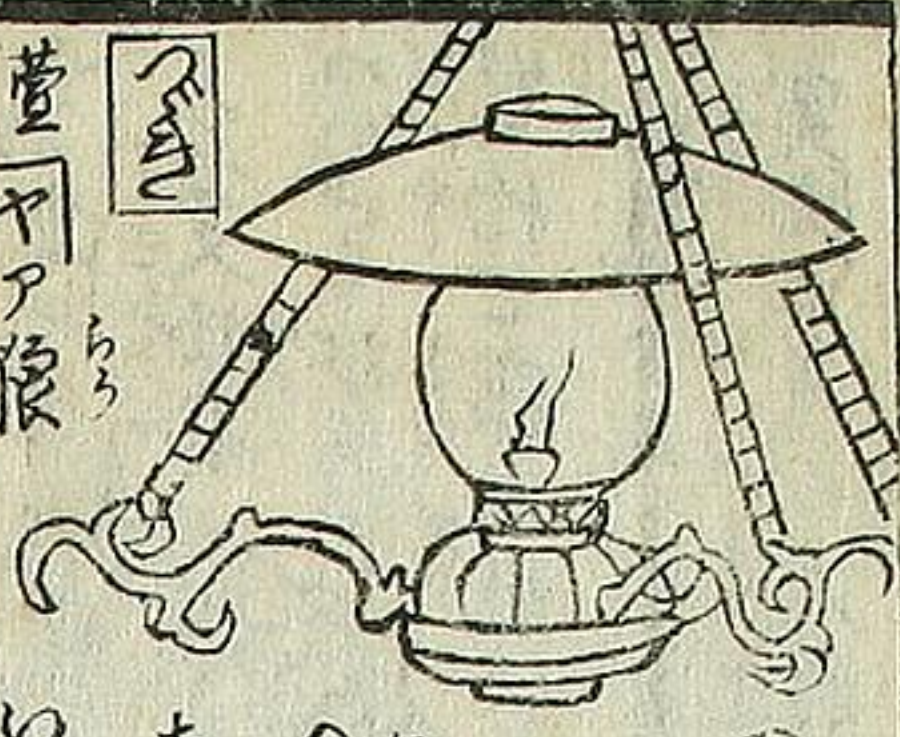
由是か...
人情...
平...
貧乏...
不...
家...
う...

見...
時...
う...
て...
う...
平...
家...
う...

延...
油...
被...
延...



村正の刀...
俊...
血刀...
二階...
血刀...
二階...
血刀...
二階...



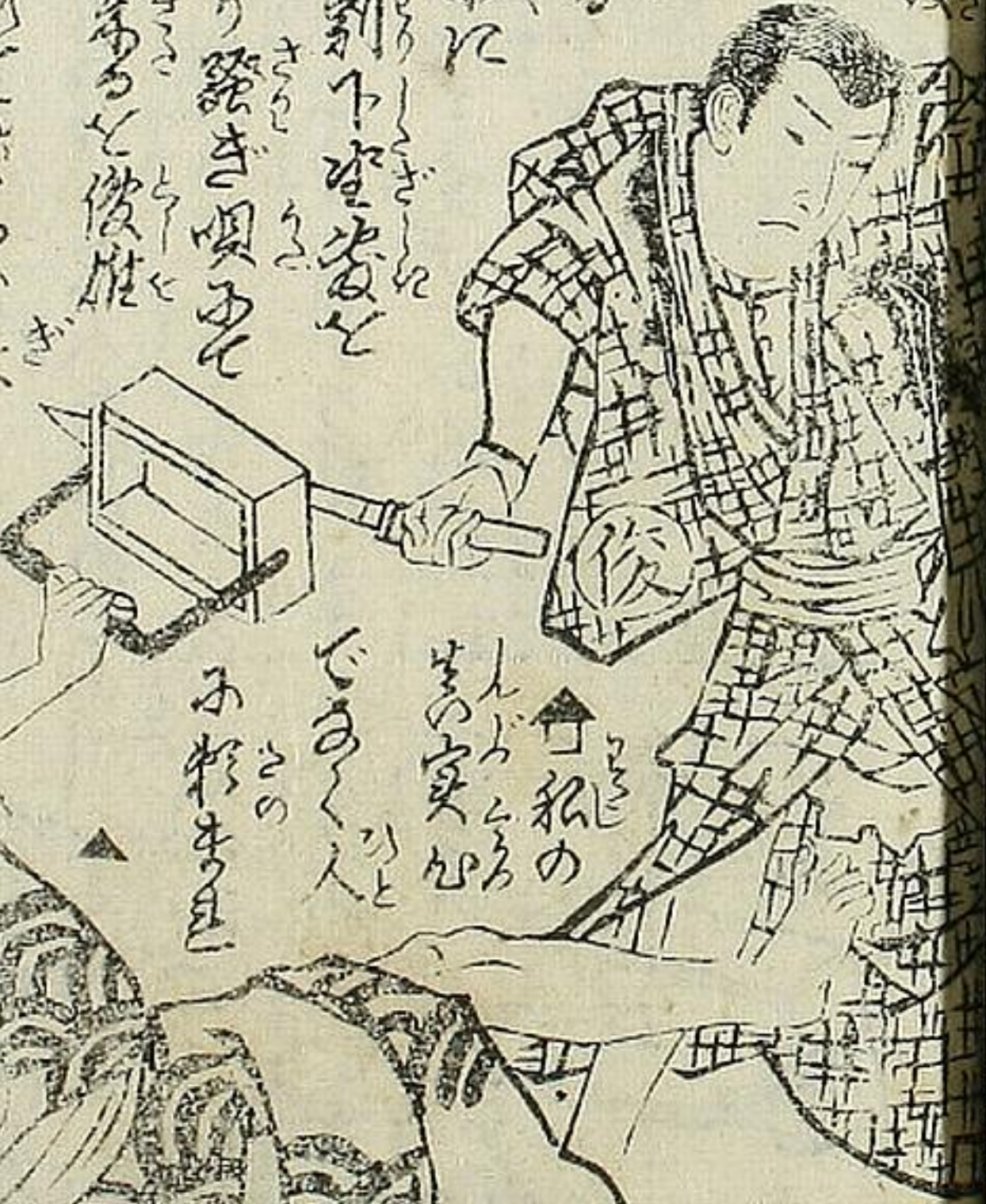
① 待て下さんせうたト云ひひさ
 むが後ヤアけ給ふありひ未練
 りの云去りあが
 今いの際ふあふと
 あふの替く控候い
 りしらねるきりく控云



萱ヤア様
 藉りの家永後様
 此萱川小島向ひ
 初今とあつては扱まる
 夏の虫を交へたる物
 花小実ゆきさる業
 さし命をひぬ光様
 トまるとヤツと云さる萱
 川の肩取海く物もけつ返

中しつる定由喧傳
 つらとあふさうか昨夜
 雲おつじと云て
 縁切りの

後
 何と人小形生
 世と云ヒテ
 生れを人の
 初は人の名
 生まるとは世
 方茶の酒家本
 と云つ下後様
 之と云さ
 驚きさる入
 由後初い
 生れにれぬ
 世と云る早
 まりまあり
 今も



二人が逃るに逃げと逃げ
 様申儀へより止める
 又傷付て蘇の物と返
 仍く之を及具再び
 ト程戸登り屋の体流雨に
 立木植付ありをえの画割下塗を
 足せ洋焼と此あり交際り發き咽めて
 足具あるト萱川家へ逃ると後様
 去るさ尻返する物より続ひてさうり本
 物を出てまの後様と云ると扱去りひ連する
 藤い立木と桶ふけ不備へ逃る又由人後
 藤と云ると四人立上り官舎ありてト藤
 と切髪を物止ると又切付る是を物
 什と云と後様の又切りんとする物花の
 合世若し此息と吐あへて後様さんまへく

小形まる
 小松の
 生れ安心
 生れ人
 由僕が大
 とお忘
 放蕩の世
 一三四
 らん免
 と云
 コレ物
 花我も
 何に
 何にか
 何にか
 何にか



幻の夜取しが
那事おぼろげなる
かたの何とやらぬき

素を恨まねんが
今日只今悪を去り
正し降しつるは蓋

横げ有悪不致す
と今蓋川の後悔の心伴天
流石の士族ぞけり

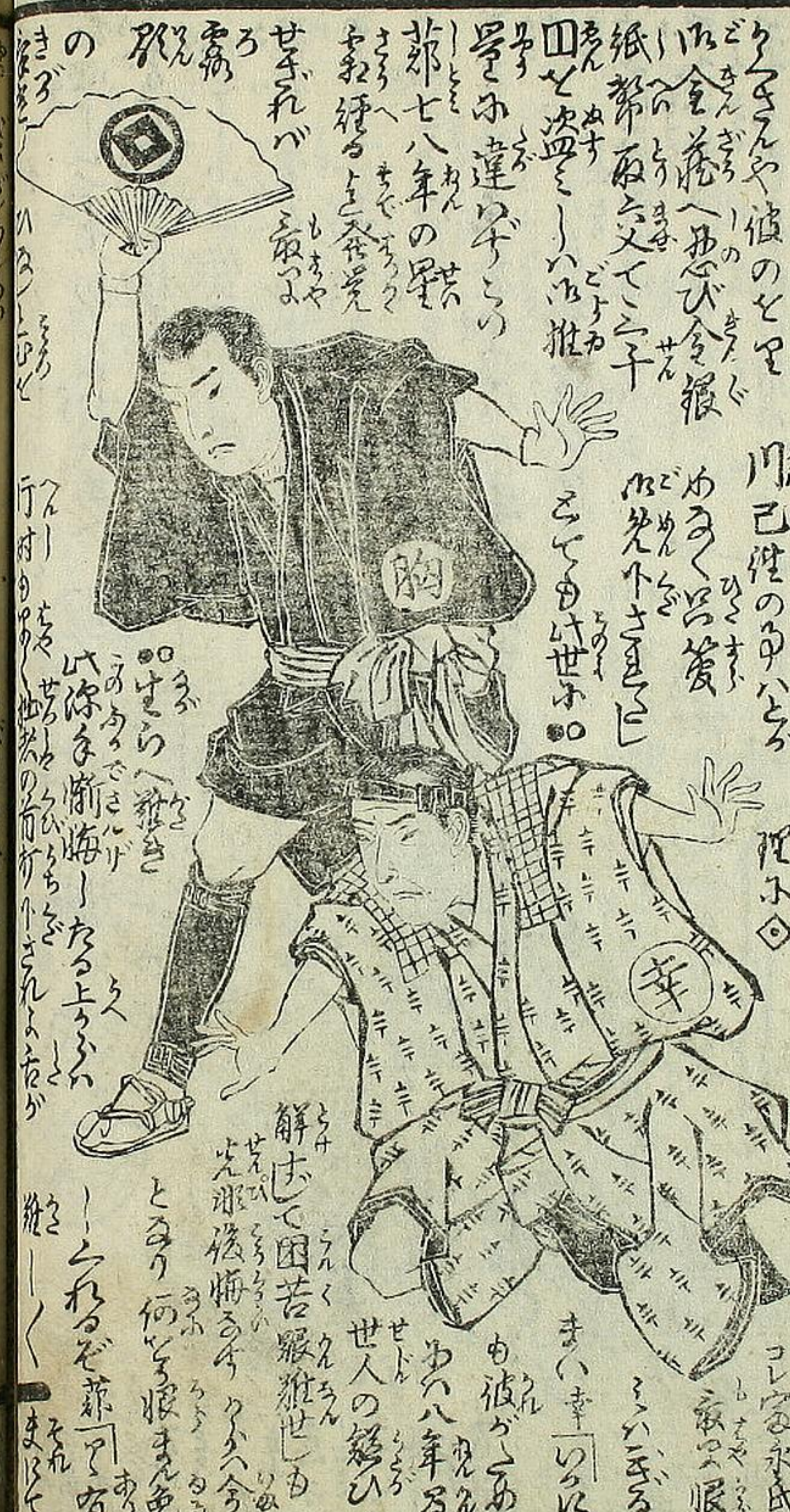
通
せいで
云々
コレは永成
恨
まの幸の
由彼が
あ八年
世人の怨
解して困苦難世
先服後悔する
と有り何と
一なるぞ
解して

金箔へおび合銀
紙幣取ら文て千
四と盗ましは推
号小違ひす
那七八年の星
おぼろげなる
甘れんが

己性の中へ
ゆるくは
先下す
こてもけ世

解して困苦難世
先服後悔する
と有り何と
一なるぞ
解して

解して困苦難世
先服後悔する
と有り何と
一なるぞ
解して



代々人と偽りの
麻へ入と湯水の
おぼろげなる
はまの
のまのありぬ
夕暮の
若る後の
家永氏のみ
之を合する
割疎ゆ
おぼろげなる
おぼろげなる

いと
けと
けと
けと

いと
けと
けと
けと

いと
けと
けと
けと





010190513985

